

生と覚醒のグリムガル

umaru

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

多少の原作知識をもつ、いるはずの無い13人目の主人公。
なぜ、ここに？

自分の他の作品、「フォーサイト」の文章力に悩み、忙しさも合わさって更新を停止していました。止まっている間自分なりに物語について考え、セリフの量の割に状況描写が少なすぎるのだろう、と結論づけました。

シリアス行方不明、を売りにして軽いテンポで書いていましたが、まあ幼稚な文章だったかな、と自分で思い、直そうかとも思ったのですが突然方向転換するのもどうか

と思い、文章力強化は別の作品でやって見ることにしました。

【フォーサイト】の方はそのままの作風で、ちまちま更新しようと思います。こちらの【生と覚醒のグリムガル】は、重い感じの雰囲気挑戦してみた作品ですので、拙さが溢れ出ると思いますが、楽しんでみて下さい。

目次

プロローグ	1
1・オルタナ边境軍義勇兵团レットム	1
ン	4
2・高校生だもの	7
3・豊作	16

プロローグ

頭の中を駆ける文章。この世界が「灰と幻想のグリムガル」だと言う事を表していた。

「もしかして、誰かいる・・・？」

「あ、うん」

「・・・います」

「ああ」

「・・・やっぱり」

「何人いるんだ？」

—————

次々と放たれる言葉が脳内の情報と一致する、なら・・・

「俺は・・・誰だ・・・？」

誰に聞かせるでもない、自分に対する疑問。口から出てしまったらしい。

その言葉は暗闇の中、人の間に響き渡る・・・

「・・・おいおい、オレ名前しか覚えてねえんだけど」

「俺も」

「俺もだ」

同意の声が上がる。どうやら記憶喪失という奴らしい。

いや、本当にそうか？

俺は知っている、ここは物語の世界だ。モンスターが跋扈し、自分達がそれを倒す義勇兵になる。それは分かる、だが【他の記憶は無い】

物語の知識だけは鮮明に思い出せるのに、自分が何をしていたのか思い出せない。そこは他の人と同じということか。

自分は異物だ、「灰と幻想のグリムガル」に、自分の存在はない。いるはずの無い13人目だ。どうすればいいのだろう。自分は居てはならないのか？まず何故自分だけに知識がある。おかしい、異物、存在しないはずの自分――

「じつとしてたつてしようがない」

意識が引き戻される。

どうやら、先導する者が現れたようだ。名前はレイジ、この塔を出た後も自分の才覚でのし上がっていく。物語と同じルートを辿っている、ひとまずはここを出るのが先か。自分がなぜこの世界に居るのかは分からないが、ここで考えたとしても何か事態が好転する訳でもなし。

レイジの後に金魚の糞のように続く人影、みな不安なのだろう、押し黙っている。そういう自分も、他の者とは違う方向にだが、やはり不安を抱えている。静かになるとどうしても考えてしまう。今俺の頭に流れている物語、消えてしまう部分を除き確かに覚えている部分は、小説でいう1巻の半分程度。まだ、続きがあつた気がする。思い出そうとすると薄れて消えてしまうが。何か、悲しい事があつたような――

ガシヤアアアン！

また、考え込んでしまったらしい。2つ目の鉄格子に鍵が掛かつていて、人を呼んでいるシーンだ。鎧の・・・男？が鍵を開け、脱出を促す。

「出る」

この男は、何故か中に残りそのまま出てこなかつた。生き物なのだろうか？分からない。とりあえずは、ここを出るしかないだろう

夕暮れ時、あかね色に染まる空、そして、赤い月。

「ああ・・・本当に、来たのか・・・」

そう呟く俺の心に走った感情は、不安でもなく、希望でもなく、薄らと、今にも消えてしまいそうな、喜びだった。

1・オルタナ辺境軍義勇兵団レットムーン

その後、塔を出た面々はと言うと。閉じてしまった塔の出入口を見つめ途方に暮れたり、突然出てきたひよむーと名乗る少女に振り回されたり、街に連れて行かれたり、自己紹介したり。混乱の中、なんとか足を進めていた。

そして、

「じゃーん！よく到着しましたですねえ。こ、こ、がつ！かの有名なオルタナ辺境軍義勇兵団レットムーンの事務所ですよん！」

俺達が塔から出てきて、この事を何も知らないのは知っている筈なのにかの有名な、と言われても。あ、そこは突っ込んでいけんじやいけないのか。

ひよむーにうながされるままに中に入ると、中はバーのような内装の施設だった。そして、最終鬼畜オカマブリトニーもいる。文章でなく目の前に出てこられると、正直震えが走る。まあ、態度には出さない。

話は大半のものを置いて進み、レンジは4人の男女を率いて事務所を出て行く。異物ながら、もしかしたらと期待してみたが。どうやらお眼鏡に適わなかったようで置いて行かれた。というかお眼鏡に適わなかったどころかすれ違いざまに

「・・・気持ちの悪い奴だ」

と吐き捨てられた迄ある。この世界の物語を知っている事から、レイジにしか分からない変な雰囲気を感じていたのだろうか。顔面偏差値のせいだと思いたくはない。

何はともあれ、俺は余り物に分類されたわけで、マナトは情報収集に出かけたわけで、ついでにモグゾーはクズに連れていかれた。助ける事も・・・出来なくはないが、まあ、野垂れ死ぬ訳でもなし。授業料として甘んじて受け止めてもらいたい。

ブリトニーに急かされて事務所を出るが、まあ先の展望が見えているわけじゃない。残った面々のうち、ハルヒロが情報を集めに行くそう。あんまりバラバラに動いてもなんだし、ここで待つのが得策だろう。多分。

「あークツソ、マジでなんなんだよここ。冷静頓着のランタと呼ばれた俺様でも焦りが隠せねーぞ」

「・・・それ、冷静沈着じゃないか?」

「うっせ分かってるよ。この空気を明るくしようとしたランタジョークだろうがよ、あーヤダヤマジで返しちやって」

悪ぶった子供のようなオーラを出す少年、ランタ

：ヤバい、殴りたい。コイツがこういう奴だつてのは知ってるけど心底うぜえ。と
りあえず人混みを眺めて心を落ち着かせる。

「ちょー、そういうの、よくないやん？うちらこれから何やればええんかもわからんぱつぱかばーなグループやのに。ふんいき悪くしたら困るやん」

関西っぽい喋り方に天然混じりの少女、ユメ。

「えつと・・・あの・・・」

細く頼りない声で何かを主張する気弱な少女、シホル

「・・・そういうことにしておいてやるよ」

呆れ口調でそういう俺、アカハ

そこはかとなく先行きに不安を抱えながら、物語は進行してゆく・・・のだろう

2・高校生だもの

あの後マナトと一緒に帰ってきたハルヒロを迎え、とりあえずギルドに通い最低限の技術を学ぼうということになった。銀貨8枚で1週間、泊まり込み食事ありで専門の技術を学ばせてもらえる。

マナトは神官

ハルヒロは盗賊

ランタは戦士

ユメは狩人で

シホルは魔法使い

そして俺は・・・

「すみませーん、加入希望者なんですけどもー」

古い木で出来たドアをノックする。正しいノックは2回？いや3回だっけ。

何はともあれ、俺は「探検家ギルド」に来ていた。

探検家の評判はと言うと。

良いもの？

何でも屋

器用貧乏

悪いもの

役立たず

半端者

真の盗賊

覚えるスキルは殆どが他の職業のパクリみたいなもの。探険するために便利そうな能力は全部取り込んで出来たのが探検家だ。

武器の扱い、魔法の扱い、罫の解除方法や設置の仕方など、幅広くスキルを覚える事が出来る。が、同業者からは蛇蝎の如く嫌われている。

「はいはいはい、加入希望者だって？物好きも居たもんだなあ」

中から現れたのは30は越したか、というような金髪碧眼の男。割とイケメンだと思う。恐らくこの男が助言者なのだろう、時間は有限なのだから有効に活用しないと。

「はい、仲間かバランスの良い職業の構成なので、隙間を埋めれるように何でも屋と言われる探検家になろうかなと」

「ふーん、まあそれはなんでもいいや。これから七日間街の外に野宿したりモンスター

と戦ったりして詰め込みで覚えてもらうよ。死んでも責任は取らないから」

いきなり死ぬとか言われてしまった。まあモンスターと戦うなら忘れられない事だろうけども。油断するつもりは毛頭ないしそう簡単にくたばってたまるか。俺はなんとしてもこの世界に来てしまった理由を突き止めるんだ、そして記憶を取り戻させてもらう。差し当っては戦闘能力を身につけることが先だな、仲間死なせたくないし。

あと助言者の名前はアリルらしい

時が流れるのは早いもので、あつという間に1週間が過ぎた。今回の指導で俺が得たものといえば。

メイスの扱い方

投擲術

コップ1杯程度の水を出す魔法

軽い傷を治す魔法

そして探検家の基本にして奥義となる、「トレジャーサーチ」だ。

名前の通り、宝物の場所が分かる。魔法の分類に入っているが消耗は少ない方だ。

俺が探検家を選んだ理由は一つだけじゃない、序盤は金稼ぎに苦労するし、モグゾーがパーティーを追い出されたら・・・最悪人数的に俺が抜けようかと思う。原作では

俺以外の面々で6人パーティだし、聞くところによると補助魔法の上限が6人なのでそれ以上は推奨されない。1人であぶれることも考慮しなければならぬだろう。まあ、しばらくは一緒に行動するだろうけど。

「先生、ありがとうございます」

「うん、君はだいたい筋がいいから大成するだろう。お金を稼いだらまたスキルを覚えに来るんだよ」

「はい」

行動を共にしたア Ril 先生に別れを告げ、待ち合わせ場所の市場に向かう。

もちろんマナト達と待ち合わせをしている。昼前の市場はあまり混んでおらず、すぐに待ち人を見つける事が出来た。

「よっ、久しぶり」

ユメとランタ、そしてハルヒロが待っていた。既に始まっている人の話に入っていける質では無いので声だけ掛け、1歩離れて聞きに徹する。

市場を観察していると、シホルがてくてくと歩いてくるのが見えた。シホルもこちらに気がついたようで、ペこりと頭を下げる。

シホルが合流すると、一気に胸の話題に移行した、男として参加しないわけには行かないだろう。

「確かにシホルが巨乳なのは自明の理だ、しかしユメもなかなか大きいのではないだろうか？」

「お前真面目っぽい顔してんのに割と下ネタぶっ込んで来んなおい・・・てかユメはちっばいだろうが」

「ちっばいいいな！」

「ぶぶっ！」

ちっばいと言ったランタが軽い攻撃を受けて吹き出す。まあ自業自得だな、胸に貴賤はないぞ。

その後も軽い世間話をしているとマナトが合流して来た、そこでランタが戦士ではなく暗黒騎士になった事が露見し批判を食らっていた。俺はモグゾーが合流する事が分かっているので良いのだが、居なかつたらどうするつもりだったんだろこいつ？

まあとりあえず行こうぜ、と言った感じで進み街を出る。するとそこには項垂れる巨漢（モグゾー）の姿が。でしようね

んで、合流するまでは原作と同じなんだけども。やはり人数の問題が出てくるよう
で。

「んー、じゃあ、別れようか。アカハは前衛もできるの？」

リーダーのマナトがそう聞いてくる、前衛が出来るか、と言われると俺はリュックを

持っていて多少動きは鈍いが盾として使えなくもないし、防具も皮鎧なら付けてるし、武器は近接武器。ついでに傷も治せる。モグゾーを除くと1番前衛向きかもしれないな

「多分出来るし、軽い物なら傷も治せるからマナトと俺で2つに別れよう。内容はどうする?」

「うーん・・・そうだね・・・」

俺個人の考えでは女の子が来てくれると嬉しいな、男として。あとランタの手綱を握れる気がしないから持って行ってほしいというのは秘密だ。

「そういえば、ユメは弓あんま使えないみたいだし、後衛は1人しか居ないようなもんだよな、俺の投擲は距離が無いし」

「ああ、そうだね・・・」

「おい、早くしようぜ? 時間も余裕のある訳じゃねーんだからよー」

・・・お前が戦士なら割と単純に終わったんだけどな・・・暗黒騎士も前衛ではあるけど攻撃的な職業で装備も軽いものしかないし。

「ユメ、索敵とは一応できる? 獲物探すのに必要そうだし」

マナトがそう問いかける、手持ち無沙汰にしていたユメは考え込み、

「うん、多分なあ、出来る思うよー」

ふむ、不安だな。ぼわぼわしてて危なっかしい気がしてならないんだが。

あ、そう言えばシホル攻撃魔法は覚えてなかったような。遠距離火力最初っからなかったやん……

エセ関西弁が出るほどにシヨックを受けた。マナトもそこに気づいたようで

「シホルは補助役で攻撃力はあんまりない、ユメは殆ど前衛、男は全員前衛だからなあ……。そう言えばアカハは宝物が分かるんだよね、それじゃあ、ユメ、シホル、アカハでお金になりそうな物を集めるのはどうかな？ 戦闘もできないわけじゃないし、シホルは相手の動き止めたりも出来るから安全に逃げれると思うよ」

「男1人だぞおい」

それは流石に荷が重いんじゃないですかねハルヒロくれ、あでも索敵係だわ。ランタ……。いや要らん、モグゾーは壁役だしマナトは論外……。あれ逃げ道無くてね。

いやでも確かに女の子来て欲しいとは思ってたけどまさか2対1とは思わなんだぞ。

「え、2人も流石に嫌だよな？」

一縷の望みにかけて声をかける、シホルとかがマナト君と行きたいとか言ってくれな
いかな、望み薄か。

嬉しいけどさ、女の子と3人きり？ は。恥ずかしいじゃん？ 高校生としては女の子を意識しちゃうお年頃なんですよね

・・・高校生ってなんだ？

「うちはええよー」

「私も・・・大丈夫です」

「じゃあ、決まりだね。アカハ、ぼーっとしないで気合入れてくれよ」

記憶の欠片を探っている内に話は決まったらしい。意識をそらすと、先程感じた違和感は消えてしまった。

「・・・おう、分かった。各自の判断で宿に帰るタイミングは決めようか、絶対に夜まで残るなよ」

「・・・あ、そう言えば、小説では穴鼠に遭遇した時すごい慌ててたよな。対策を教えよう」

「森には穴鼠が出るらしいけど、襲われたら慌てずに横なぎに攻撃した方がいいぞ。脚が早くて上から切りつけてもどこかに行っちゃうから、進行方向を防ぐように」

「うん、了解。お互い頑張ろうね」

そう言ってから、別れて森に入る。さて、上手く戦えるかな・・・？

そう言えば、正直ランタがパーティ編成にごねると思っただけだな。まあ、ヘタレ

な所もあるし男だけのが気楽でいいのかもな

3・豊作

「じゃあ・・・まあ、よろしく頼む」

少し気まずい気持ちがあり、なんとも言えない声掛けをする。

「アカハくんってなあ、さつきは変な事言うてたのに、1人になるとなんかへんやなあ？」

・・・だつてさつきは変な事言つても予想してる反応返してくれる男がいたし・・・女の子との会話なんか殆どした事ないよ、多分。記憶無いけど。

「まあ、異性と話すのは苦手みたいなんだよな、覚えてないけど前からそうだったと思う。ふざけ合える相手が居たら大丈夫だけど、その、女の子だけだとちよつと・・・」

「あ、わ、分かります、私も、男の人と話すの苦手で・・・」

同士よ・・・！やつぱさうだよなー、恥ずかしいし。俺にはチャラ男のコミュ法がさっぱり理解出来ない。そりゃ女の子と仲良くしたいけどもグイグイ行くのは気が引けませんぜ。

アホな事考えてると森に到着だ。鬱蒼と生い茂る木々が視界を遮り、死角を発生させている、突然襲いかかられたらどうしようか。

「んじや、まあ、トレジャーサーチ使ってみるよ。ユメは周り警戒しててくれ」
「ほーい」

トレジャーのは魔法としては異質だ、エレメンタル言語を使う必要がないという点
が。

なぜ使わないのか知るものは居ない、初代探検家だけだろう。知る必要もないし
少しばかりの魔力と引き換えに周辺の宝物を探す、人間界目線で価値ある物に反応す
るこの魔法。半端なく便利だ。ほかのスキルがなくとも最悪これでやってける程度に。
流石探検家の奥義と言ったところか。

少し離れた所に反応があった、幸先いいな。魔法を使うと、ピンポイントで場所が分
かる訳ではなくその方向に淡い光が見えるようになる。場所が遠いほど光は弱くなり、
最後には目に見えなくなる。この光度なら・・・100メートルくらいかな？

あと対象のレア度によって色が変わり、
安いものから

白

灰

緑

青

黒 金 銀 赤

となる。今見ているものは灰色なので、2〜30カパーにでもなればいいほうかと思う。

「こっちの方向だ、行こう」

2人を連れて先に進む。外付けの物入れを左手に構え盾替わりにし、右手でメイスを持つ。何処に敵がいてもおかしくないからな。

緑の香りが心地いい、空気が澄んでいる。鳥の鳴き声がしてきて、心が癒される。もうここはモンスターの巣窟ではあるが、とてもそんな雰囲気を感じさせない様子だ。ユメとシホルは2人でコソコソと話をしているなんだろう、悪口を言われてないだろうか。私、気になります。

そうこう考えているうちに、光がどんどん強くなってきた、小さくなる。少し開けた森の中に、いくつつかの袋が落ちていた。殆どは白だったが、いくつつか灰色の物も混じっているようだ。

「これは・・・ゴブリン袋だな。なんで落ちてるのはかは分からないけど・・・、あ、抗争

でもあったのかな？なんにせよ、なかなかお金になるな」

ユメとシホルに頼み、袋を集めてもらう。ゴ布林袋というのはいわゆる宝物入れだ。ゴ布林に見られる習性で、宝物を袋に入れておく。まあ、ゴ布林自体に使える素材がほとんど無いのでプラマイゼロ、どころか大抵のゴ布林は大したものを持っておらず、人気のあるモンスターではない。

よく見ると首飾りも数多く堕ちていて、泥ゴ布林とゴ布林が戦ったようだ。お互い被害を受けている撤退、死体は動物に食われたって所かな。ゴ布林がダムロー旧市街から出てくるとは。

「なんか、いっぱいあるなあ、お金になるんかな？」

「牙とか、入ってますけど。小さいからならないんじゃないですかね・・・」

「んー、と、全部換金出来る物だから、一応持つておくよ。リュックに入れるから貸してくれ」

2人から袋を受け取り、リュックに入れる。なかなか大きなリュックなのでまだ余裕がある。中に入ってるのは、非常食の干し肉と多少の水分。まだ駆け出しも良いとこなのでろくなアイテムも買えていない。

付近の物を拾い終わった俺たちだが、見落としていたものがあつた。緑のアイテムだ。いかんせん森の中なので気づかなかつたが、ふとけもの道に目をやると光っている

のが見えた。

拾ってみると、少し薄汚れた銀貨だった。すり減っているの、本来の価値より下がるだろうが立派な銀貨だ。

「わあ、すごいやん。トレジャーサーチって便利やなあ。うちも探検家なろうかなあ」「ユメは、狼犬が欲しいんだろ?」

確か市場でそう言ってた気がする、残念ながら探検家に猟犬を手なずける能力は無いので、欲しいなら狩人になるしかないだろう。

「あー、そやった。狼犬かわいいんやんな、シホルも犬とか好き?」

「え、えつと、私は、猫の方が・・・」

「猫かあー」

また2人の会話に戻る、ちよつと入っていけないな、俺の対女子力では。

その後もトレジャーサーチを使い細々としたアイテムを集めていく。それは落とし物らしいものだったり、ゴブリン袋だったり。1度だけ、骸骨を見つけてしまったこともある。女の子2人が青ざめ、萎縮してしまっていたため頭を掴んで反対方向を見させた。

例え人の遺品だろうと俺達には金が必要だ。かと言って女の子に死体あさりなんてさせる訳には行かないので自分がやるしかない。

そんなハプニングがあったりもしたが、森の浅い所だったからか、運が良かったからか。モンスターには1度も出会わなかった。穴鼠には1度だけ会って、横なぎをメインに攻撃し撃退した。その際ユメが足を噛まれたので治療した。ほかの人に使うのは初めてだったが上手くいったようだ。

そう言えば、穴鼠戦ではシホルが意外な活躍を見せた。杖は割とリーチが長く、バツトのように振り切ると1匹の穴鼠が吸い込まれるように激突して吹き飛んだのだ。飛んだそいつはもう1匹を巻き込み気絶した。俺が駆け寄りトドメを刺しておいた。シホルはあまり殺傷が好きではないようなので。杖振った時もへっぴり腰だったし。

「今日だけで割と稼げたな、穴鼠は割といい値段になるし。2人とも今日は助かったよ」「いえ……こつちこそ、ありがとう」

「うちからもありがとなあ」

予想外に稼げたので、体感早めに街に戻った。まあ、あの当たりのアイテムは粗方取ってしまったし、次からはこうはいかないだろうけど。いつかは落ちてるだけのものなんか尽きてしまうので、戦うことも視野に入れなければならない。

「そう言えばユメ、足はもう大丈夫か?」

「うん、アカハの魔法でうっかり大丈夫やよ」

「そこはすつかりとかだろ……」

今日1日で、2人とも随分仲良くなれた気がする。ユメは明るくて話しやすいし、シホルも物静かだけど話しかけるとちゃんと答えてくれるから、こつちも落ち着いて話せた。

町について、戦利品を換金する。場所は、ア Ril 先生に紹介してもらった店だ。そこらの店だとぼったくらられるかもしれないのでこれからもここを利用しようと思う。

「おやおやアカハくん。こんな可愛いガールフレンドを2人も連れてくるとは中々隅に置けないねえ」

「ちよ、違いますよ。確かに可愛いですけどまだ知り合ったばかりですし。ただのパイティメンバーですよ」

店主は中年のおばさんで、話好きなのでこういつてからかわれるとは思った。でも換金する所を見てもらわないとまだ信頼関係が薄いので、ちよろまかしてると思われるかもしれない。ついでに個人で大体の相場を覚えておいて損は無いだろう、という考えもある。騙される危険も減るし。

「いきなり可愛い言うやんか・・・」

「(は、恥ずかしい・・・)」

「今日の戦利品です、換金お願いします」

大小様々な牙とか、すり減った貨幣、小さな小さなナイフなどもある。

大物といえど穴鼠だな、物理的にも。

「ふーん、随分と色々持つてきたねえ。いい稼ぎじゃないか」

次々と鑑定していくおばさん。自分でも鑑定金額には目星を付けているが、少しでも高くなることを願おう。

「うん、締めて5シルバーと70カパーでどうだい？この穴鼠なんか傷が少ないから少し高めに買い取らせてもらおうよ？」

金額に異論はない。交渉するにも、これでも割と条件がいいのでこのままでいい。傷が少ないのは、俺とシホルが打撃で倒したからだな。ユメは短剣だったから傷が大きい。

あ、それに気がついたユメがしょんぼりしてる、そこまで気にしなくていいのに。

「はい、ありがとうございます、それでお願います」

「はいよ、落とすんじゃないよ」

鈍く光る5枚の銀貨と70枚の銅貨、正直重い稼ぎとしては最上と言っている。小説では序盤殆ど稼げてなかったはずだ、レイジたちと比べてはいけない。

帰りにマナト達に内緒で串焼きを買って食べた。串焼き屋の前を通った時に皆示し合わせた様にお腹が鳴ったのだ。

2人は遠慮していたが、所詮1本4カパーのもの。自分のポケットマネーで奢らせて

もらった。今日の稼ぎがどう分配されるか分からないのが不安だな。普通に考えたら
3人で分けるんだろうけど、もしあつちの稼ぎがあんまりにも悪かったら分けないと、
かもしれないし・・・